

がん情報サロンボード

2016/02/10

がん情報サロン 富田 明人

平成27年度がん患者等意見交換会所感

平成27年度がん患者団体等意見交換会が開催された。この会は1月25日に開催する予定であったが、天候が不順で延期され2月8日（月）に島根大学医学部付属病院看護学科棟で開催、隠岐から益田までの17サロン17名が参加した。参加者は想定したより少なかった。私も会いたい人がドタキャンで待ち人来たらず残念でした。

会議は、2部構成で前半は3月開催される病院長との意見交換会の意見発表のテーマの収集であった。

第2部では島根大学附属病院の斎藤洋司先生の「緩和ケアについて」の講演と意見交換をおこなった。

1部では4グループに分割しそれぞれの分野について意見の集約作業を行った。あらかじめテーマが出されていたが、がん治療における医療者と患者のコミュニケーション、がんサロン運営について、情報の周知、医療格差等について集約された。

医療者と患者とのコミュニケーションの課題は昨年も提示された。患者にわかりやすく丁寧に説明して欲しいとの声は患者の切望ではあるが、医師によって説明のグレードが異なる、主治医の交代により情報が引き継がれていず新たに患者が説明する必要があった等連携の不備も指摘された。医療者間の連携を強めてほしい。クリニカルパスの活用や診療サマリーの標準化等患者に寄り添った診療を期待したい。

患者も自分の病気に関心を持ち学習し「賢い患者」になる必要があると思うが、機会とか場所が少ない。私自身も正確な情報を医師に伝えるスキル不足で困惑している。研修の機会を作れないのかな。

診療体制に医師の問診を増やして欲しい。多くの医師はパソコンの情報を患者に伝え患者の答えを訊くことが多い。患者は知識、情報とも少なく困惑するだけである。丁寧な問診による精度の高い診療は患者の信頼を得ることが出来、医療者と患者のコミュニケーションの改善にも役立つと考える。

賢い患者になるには情報必要である。都会の情報はTV、新聞、雑誌等でとれるが、身近なローカルの情報は少ない。がん情報は地域の公開講座等で行われているが、がん患者に有用な情報は少ない。また、県民に対しての告知が十分とは言えないと思う。

病院のホームページには治療内容や治療実績、スタッフの経歴等患者に参考になる情報の掲載が少ない改善を望みたい。

サロンの運営については、院内サロンであるので各病院で対処が異なっている。場所を提供するのみ、医療従事者の参加しているサロン等対応はいろいろである。いずれにしても院内サロンであるので病院のサポートは欠かせないが、患者も運営に積極的に参加するスキルアップが必要である。

がん医療の格差についての発言があった。平成19年がん医療の均てん化を目指してスタートした。その後の医療技術の進歩にしたがいいわゆる標準治療は全国の病院で受けることができるが、先進的な医療は情報を含めてローカルでは地域格差が生じている。これらの解消は難しい課題であるが医療者、行政、患者が連携して解決することが求められる。

サロンも高齢者が増え情熱やパワーが失われサロン間の格差も生じている。今一度体制を立ちなおす時と考える。

2部では斎藤先生に「緩和ケア」についてレクチャーしていただいた。島根県では、「緩和ケア研修会」を平成20年度に島根大学医学部附属病院で開始して以来、毎年県内6か所のがん診療連携拠点病院等で実施しています。研修会は高度な標準化されたカリキュラムで研修時間の合計は12時間以上2日間の日程で開催しています。

緩和ケアの基本的技術を習得した医師数は平成26年度までに700人を超えて研修修了者数は全国でも上位にランク付けされています。

世間では、緩和医療は終末医療との誤解が流布されていますが、緩和医療とは診療の初期から患者のさまざまな苦痛に対処する医療であることを広めたい。

会場からは2時間の研修で緩和ケアを習得できるのか？医療者以外の人も研修に参加できないのか。研修後の現場でのオペレーションについてチェックするシステムが必要である等の提案や意見が出された。

今回の会議でいろいろなことを学んだ。キーワードは「格差」である。医療格差、医療者と患者、行政と患者の志向の格差である。患者の視点を取り入れた医療に立ち戻るにはどうしたらよいか大きな課題が残った。

(富田)